「宜し〳〵、また噺の種にでもなるであろうから見て置け」
「有難う存じます」
「案内をして取らす、サア參れ」（鳴物六段）
菅沼様が先に立つて襖をば左右にスーツと開けましたが、吾々の宅と違ひまして、何しろお姫様の御殿でございます。襖でも一間半四枚建と云ふやうな小さい襖やございません。一間一枚と云ふ大きな襖でございます。
「どうぢや噺家」
「アヽ立派なものでございますな」
「此間は松の間ぢや」
「へー宜う描いてございますなア」
「フム宜く描いてあろう、此畫は狩野古法眼光定の描れたのぢや、サア此畫も同く光定の描れた櫻の間ぢや」
「アヽ結構でございますな、宜う描いてございます、私のやうな解らん者でも驚きました」
「立派な物であらう」
「これは何うも恐入りました」

「サア此間が乃ち梅の間ぢや」
「ヘエ、此畫は何誰の繪でございます」
「此畫も矢張り光定ぢや」
「ヘーエ、此間は梅の間でございますか」
「然うぢや」
「ヘエ成程、合して都合三光の間でございます」
「コレ三光の間とは何の事ぢや」
「イエ、夫れは尊公方の御存じのないことで」
「サア此方へ參れ」
「ヘエ、此間は何の間でございます」
「此畫は元信先生の描かれたのぢや」
「ヘー、矢張り」
「フム狩野家ぢや」
「狩野古法眼元信でございますか、ヘエ牡丹でございますなア」
「然うぢや、此間は牡丹の間ぢや」